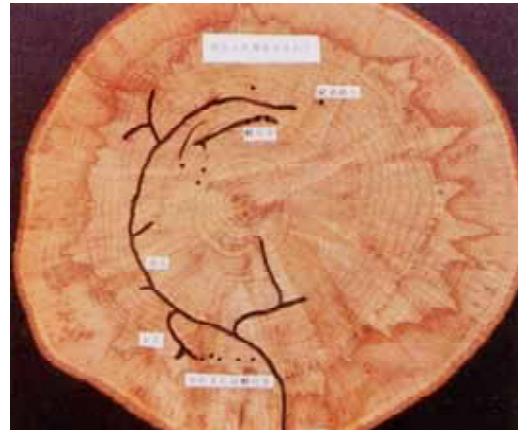


## カシノナガキクイムシ

### 概要

本種はナガキクイムシ科に属するクイムシで穿孔する際に *Raffaelea quercivora* という菌を持ち込み、この菌が蔓延することにより通水阻害が起こり萎凋枯死する。

本州の日本海側地域では、本種によるミズナラの集団枯損被害が多発し「ナラ枯れ」とよばれ、大きな問題となっている。本県では、1980年代後半に内之浦町で1990年代前半には霧島地域、1990年代後半には桜島、2000年代前半には南薩地方を中心にマテバシイ・アカガシなど常緑カシ類の集団枯損が発生している。



カシノナガキクイムシ成虫（左，右）  
（前胸背板の孢子貯蔵器官）

材内の孔道と菌による変色

### 加害樹種

本県の被害樹種はマテバシイ、イチイガシ、アカガシ、ウラジロガシ、イタジイ、クヌギなどのブナ科の樹種をはじめにタブノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、ヤマザクラ、イイギリ、イスノキ、クスノキ等で穿孔被害が確認されている。

これらの樹種のうち枯損につながるのは、マテバシイ、イチイガシ等のブナ科の樹種のみであり、他の樹種ではほとんど枯損は見られない。また、マテバシイでも穿孔加害を受けても枯損しないものもある。

また、被害は林分内で大きいものに集中し、10cm以下では枯損するものは極めて少ない。

### 生態

一夫一妻制の養菌性クイムシで、本県では成虫は5月下旬から出現を開始し6月下旬にピークを迎えた後、11月頃まで活動している。一部個体が年2化している。穿孔は脱出開始直後から見られ雄がはじめに穿孔し雌个体を呼ぶ。1本の木で500個以上の穿孔を受けることがある。枯死木内では次世代虫が繁殖しており、木くずが地際に堆積し幼虫密度は50,000頭/m<sup>3</sup>に達することがある。穿孔を受けて枯死しなかったマテバシイでは穿孔孔から樹液を噴出しており、こうした立木では翌年以降加害されても枯死することはない。

### 防除方法

本県の場合、これまでの被害地では被害発生から3年程度で終息していること、ブナ科以外の樹種では枯死が発生しないことから放置していても大丈夫と考えられる。

予防手段は健全木へのビニール被覆、殺菌剤注入、樹幹表面への粘着剤散布がある。

ビニール被覆：地際から高さ2mまでを被覆。

殺菌剤注入：ドリルで樹幹に孔をあけ、薬剤を注入する。2～3年有効。

粘着剤散布：殺虫剤と粘着剤とを3mの高さまで散布する方法、粘着剤のみを5mの高さまで散布する方法がある。後者はカシナガブロックとして製品化されている。1年有効。



胞子貯蔵器官の拡大写真



孔道からのフラスの噴出



寄生木樹幹表面の様相（金峰町 2007）



生存木の樹脂の滲出状況



被害の様相（金峰町 2007）